

2022年横浜ナザレン教会・三位一体後第九主日(8/14)礼拝

「信仰の最初の一步」

使徒言行録第7章1節から第7章8節

【聖書】

7:1 大祭司が、「訴えのとおりか」と尋ねた。2そこで、ステファノは言った。「兄弟であり父である皆さん、聞いてください。わたしたちの父アブラハムがメソポタミアにいて、まだハランに住んでいなかったとき、栄光の神が現れ、3『あなたの土地と親族を離れ、わたしが示す土地に行け』と言われました。4それで、アブラハムはカルデア人の土地を出て、ハランに住みました。神はアブラハムを、彼の父が死んだ後、ハランから今あなたがたの住んでいる土地にお移しになりましたが、5そこでは財産を何もお与えになりませんでした、一步の幅の土地さえも。しかし、そのとき、まだ子供のいなかったアブラハムに対して、『いつかその土地を所有地として与え、死後には子孫たちに相続させる』と約束なされたのです。6神はこう言われました。『彼の子孫は、外国に移住し、四百年の間、奴隷にされて虐げられる。』7更に、神は言われました。『彼らを奴隷にする国民は、わたしが裁く。その後、彼らはその国から脱出し、この場所でわたしを礼拝する。』8そして、神はアブラハムと割礼による契約を結ばれました。こうして、アブラハムはイサクをもうけて八日目に割礼を施し、イサクはヤコブを、ヤコブは十二人の族長をもうけて、それぞれ割礼を施したのです。

1 アブラハム物語

今日の聖書から、使徒言行録の中で最も長い説教が始まります。ユダヤ社会の最高裁判所と言える最高法院で、不当に逮捕されたキリスト者・ステファノが、最高法院の議員たちに向かって、イエス・キリストへの信仰を語ったもの。ステファノは、旧約聖書の創世記が語るアブラハムから始めました。アブラハムは、現代世界では、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教のもととなった人、と言われていています。ですが、所謂、教祖ではありません。彼は何巻にも渡る書物も、壮麗な神殿も、宗教団体も残してはいない。ステファノが「**神はアブラハムに一步の幅の土地さえも与えなかった**」と語っている通りです。アブラハムは、謎に満ちた不思議な存在です。

説教でも何度か紹介しました哲学者、森有正先生。敗戦後、留学が可能となった時に真っ先に東大からフランスに派遣されるなど、非常に優秀な方だったようですが、波乱万丈の人生を送った方です。留学が終わっても日本に帰らず、妻を日本に残しつつフランスで恋人と暮らしました。この為、日本に帰ることができなくなり、長くフランスに住み活躍していました。晩年は日本に戻り、国際基督教大学で教えていたようです。この森先生がアブラハムがとても好きで、ICUのチャペルでアブラハムについて何回か語りました。それがまとめられ

て「アブラハムの生涯」という本になっています。この本を読んでしみじみ思うのは、聖書に描かれているアブラハムの生涯の中には、現代を生きる私達と同じ信仰が息づいている、という事です。いえ、逆ですね。アブラハムと同じ信仰が、4000年後を生きる私達にも与えられている、私達にも息づいている、事を感じます。

それは、森先生や私達だけではなく、数千年前、聖書にアブラハム物語を記した人々も同じだったのでしょう。アブラハムからはるか後の時代の信仰者達が、神を信じて生きる信仰の核心、コアを、アブラハムの生涯に見出したのです。約4000年前、その生涯において、定住の地を持たず、メソポタミアからパレスティナの砂漠を彷徨い歩いた一人の人、アブラハムとその家族。今日の聖書、ステファノの説教は、現代にまで連綿と続く信仰の最初の一歩、アブラハムの出発から始まっています。

2 アブラハムの旅立ち

アブラハムは、最初、父テラと家族と共に、月を神として信じるメソポタミアのウルに住んでいたようです。創世記第十一章の終わりには、アブラハムの父テラは、七十歳の時、アブラハム、ナホル、ハランの三人の息子をもうけた、と記されています。一年に三人の子どもが、一人の父親から生まれました。一夫多妻の当時、最も考えやすいのは三人の妻との間にそれぞれ一人の子をもうけた、という事です。この事からも、アブラハムの家族の中には、複雑な感情が交錯し、それが家族のメンバーたちに暗い影を落としていた、と推測できるでしょう。又、メソポタミアの地で経済的に発展していたウル地では、豊かさ故に、社会が腐敗していた、という現実もあったようです。そのためか、アブラハムの父テラは、アブラハムとその妻サラ、ハランの息子で自分の孫であるロトをつれてカナン地方、今のパレスティナを目指して旅立ちます。ハランは既にウル出発の時、死んでいましたが、息子ナホルとその妻は生きていましたが、テラはナホル夫妻とその家族を連れて行きませんでした。そんな所にも、家族が決して一枚岩ではなくほころびがあった事が分かります。信仰者アブラハムが生きた環境は、綺麗ことでは済まされない、私達と同じように、やりきれない人間の現実があったようです。

父テラは、ハランという所まで来るとそこに住み、そこで死にました。その後、神がアブラハムに語りかけた、と聖書は語ります。「あなたは生まれ故郷、父の家を離れて/私が示す土地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民にし、あなたを祝福し、あなたの名を高める。祝福の源となるように。」(創世記12:1~2)。聖書は、この神の言葉の後に、「アブラハムは、神の言葉に従って旅立った。」と短く語るだけです。いったい、アブラハムがどのようにこの神の招きを聞き取ったのでしょうか。それは全く分かりません。ただ、彼は、神としか言えない存在、自分を越えた大きな存在に、「住み慣れた父の家、ハランを旅立ちなさい。私が示す土地へと旅立ちなさい」と声をかけられた、としか思えないような強い促しを感じた、「ここから旅立つべきだ」という強い想いが与えられた事は確かでしょう。

その促しは、アブラハムが別の土地で何か大きな一族を興そうとか、世界宗教を起こそうとか、莫大な財産を得よう、等という野心から生まれた確信ではありません。そうではなくて、彼が生きている社会での、家庭での出来事を彼自身が深く受け止め、神に祈り考えた時に与えられた確信ではなかったか、と思います。だからこそ、アブラハムは長く住んで相当の財産を築いていたハランの土地を出て行きます。彼には、人間的に見て何の保証も与えられてはいません。ただ神の言葉、神の約束だけ確信して一步を踏み出す。その一步こそ、それから4000年以上続く信仰の最初の一步でした。

会堂に集われた方々、インターネットで共に礼拝をささげている方々、どのような経緯で教会とつながり、神を礼拝するようになったのか、その道筋は様々でしょう。信仰者となってある程度の時を経ている方々は、自分への神への語りかけが、どのような形で何を通して行われたか、是非、振り返って考えてみて頂きたい。主イエス・キリストの父なる御神は、私達の生涯で起こる全てのことを通じて、「ここから旅立ちなさい」と促してくださる方です。それは、後になってから分かる事の方が多いようです。

3 信仰と信頼

さて、アブラハムの出発にみられる私達の信仰の本質とは何でしょうか。それを、冒頭の森有正先生は、信仰と信頼の違いを通して、次のように語っています。「信頼というのは、究極に突き詰めれば、信頼する根拠をその人の他に持っているということ。性格や財産、その他の手づるであっても、何か他のものを信頼している。(中略)信頼するというのは、あてにするということが中に入っている。ですから『信頼していたのに裏切られた、』と言うのです。実は、あてにしていたものがあてにしていたとおりのものではなかったというだけの意味です。」「**信頼するということは、あてにする、ということが中に入っている、いつも何かを根本においてあてにしている。**」確かにその通りです。そして、何かをいつも当てにする事は、「信仰」とは全く異なるのです。アブラハムが神から与えられたのは、信頼ではなく、信仰でした。人間的な判断ではあてにできるものなど、何も無い状態でアブラハムは、神の約束を信じました。その一つの例が、彼の妻サラが子どもを身ごもるという事でした。サラはずっと不妊症であり子どもができていなかった、そして既に高齢であったにも拘わらず、自分の子孫に対する神の約束をアブラハムは信じました。ローマ人の手紙の中でパウロはこう言っています。「この神、即ち、死者に命を与え、存在していない者を呼び出して存在させる神をアブラハムは信じ、その御前で私達の父となったのです。彼は希望するすべもなかったときに、なおも望みを抱いて、信じ、『あなたの子孫はこのようになる』と言われていたとおりに、多くの民の父となりました。そのころ、彼はおよそ百歳になっていて、既に自分の体が衰えており、妻サラの体も子を宿せないと知りながらも、その信仰が弱まりはしませんでした。」(ローマ書 4:16～19)

今日、共に読み交わした詩編121篇もそのような神への信仰に生きた詩人の歌です。冒

頭の「目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。わたしの助けはどこから来るのか。わたしの助けは来る、天地を造られた主のもとから。」という有名な言葉にそれが表れています。私達が住む日本の山というのは、緑豊かな森におおわれており、「山々を仰ぐ」と言った時、私達はそのような緑に輝く山を思い浮かべて「このように豊かな自然を作ってくださった神さまに信頼しよう」と詩人が歌っているのだと思います。しかし、それは全く違います。イスラエルの山々は、日本とは違い、荒れ果てた岩山が殆ど。豊かな実りを思わせるものは何ひとつない荒涼とした山々。しかし、そんな何のあてもないような状況であっても、必ず助けて救ってくださる天の御神の慈しみを想い起し感謝を謳う、詩人が自分に与えられているものとして見出したのは、何かをあてにしての信頼ではなく、天地を造られた真の神への信仰でした。

4 冒険者

人間的な保証は全くなく、ただ神のみを信じて、一步を踏み出す事こそ信仰。その信仰は神から与えられるもの。だからこそ、信仰は、神から与えられた冒険の旅です。神を信じ、未知の場所へ、自分達が未だ到達していない地点へと一步踏み出す、キリスト者は一人残らず冒険者です。何故なら、何より大きい冒険をしてくださったのは、神の独り子イエス・キリスト、その方だから。神と等しい子なる神、神の独り子にも拘わらず、その身分を惜しげもなく捨て、私達と同じ人間の肉体の中に人となってくださいました。創造主と等しい方であり、全知全能のお方が、儂い被造物となる。自分の在り方を変える、これほどの冒険があるでしょうか。キリストは、敢えてその冒険を犯してくださいました。父なる御神の、私達人間への愛故に、私達人間を滅びから救うために、キリスト・イエスは人となり、そして奴隷の死と言われる十字架まで耐えてくださったのです。ここに人間を救う愛がある、神の愛がある、と語ります。神の愛は、私達に、何か具体的な財産とか地位とか生活の安定を約束するものではありません。ですが、神の愛は、それ以上のもの、自分達の力だけでは決して得ることが出来ないもの、私たちがあてにするものを遥かに超える「善きもの」を与えてくださいます。その最たるものは、被造物の私達が永遠の命を得ることでしょう。永遠の命とは、不妊症の高齢の女性が子どもを宿すこと以上に不可能なこと、科学的にはあてにできる根拠は、全くありません。ですが、それは必ず実現する、と主イエス・キリストの十字架と復活を通して神は私達一人一人に約束されました。だから、私達は、何の人的保証がなくとも、何をあてにしなくても、主イエス・キリストの後に倣って、冒険の旅へと一步を踏み出すことができます。

そして、神のみを信じて踏み出した冒険旅行には、見えない主イエス・キリストが共に行ってくださいます。

5 新しい出会い

そのような冒険旅行は、新しい発見の旅でもあります。私達は、主イエス・キリストを頼りに新しい一步を踏み出す時、それまで気づかなかった自分自身と出会います。神に深く大きく愛されている自分を具体的な出来事を通して新しく教えられるし、それにも拘らず、主の愛に応えられない自分を、これでもか、と突き付けられる事もあります。そこで悔い改め、祈りつつ、主の名を呼んだ時、ご自身を殺す者をも赦した主イエス・キリストの愛を新たに示されます。こうして私達は、我が主イエス・キリストを新たに発見し、そして我が主、我が神、イエス・キリストと共に歩んでくださり、主によって生かされている自分を発見するのです。

そんな発見を謳った詩をご紹介しましょう。フットプリント、足跡という有名な詩をご存じの方も多いでしょう。全部は読めませんので、ところどころ省略して紹介します。

「ある夜、私は夢を見た。私は、主とともに、なぎさを歩いていた。砂の上に二人の足跡が残されていた。一つは私の足跡、もう一つは主の足跡であった。だが、一つの足跡しかないところがあった。私の人生でいちばんつらく、悲しいときだった。私は心を乱し、そのことについて主に尋ねた。『主よ。あなたは、いつも私とともに歩んでくださると約束されました。それなのに、私の人生の一番辛い時には、私の足跡しかありません。一番あなたを必要としたときに、あなたは、なぜ私を一人にされたのですか』

主はささやかれた。『私はあなたを決して捨てたりはしない。足跡が一つだったとき、私はあなたを背負って歩いていた。』

この詩人は、主イエス・キリストと共に行く冒険の日々で、共に行ってくださる主を信じきれない不信仰な者を背負ってまで歩んでくださる神の独り子を見出しました。そこまで主キリストに愛されている自分を新たに見出しました。アブラハムがそうであったように、この詩人がそうであったように、私達は、主と共に新たな場所へと一步踏み出すことで、新しく神について知り、新しく自分について知るのであります。それは、この地上から召される最後の一息まで続きます。そして、私たちは、今まで自分が到達できなかった所に、主と共に達することができるのです。

そうでなくて、私達がいつまでも自力で行ける場所に留まっていたら、人間は滅びるしかありません。あすは、77回目の敗戦記念日です。あれだけ大きな犠牲を払った太平洋戦争が終わった数年後には、もう朝鮮動乱が起きました。世界で戦争が絶えた時代はありません。いつの時代も、国の利益の為なら、戦争も致し方ない、という人々がいます。そんな人々を責めるだけではどうにもならない、私たちは皆、知っている筈です。私達一人一人の心にある自己中心的な想いや自分と異なる人々への嫌悪を。そんな戦争の種を抱く私たち自身が主イエス・キリストと共に十字架に死に、憎しみと分断の種を取り去ってもらうしかありません。そして、主に全てを委ねて、イエス・キリストの「人を裁くな」「敵を愛せよ」という教えを実践するしかないのです。実際、キング牧師の「非暴力不服従」の抵抗運動、マザーテレサのあらゆる違いを超えて人間として愛する業など、キリストの教えを實踐することが、私達の歴史に新しい地平を開いてきました。私達力だけで行ける所に、キリスト・イエスの教えはないのです。私達がただ神のみを頼りにし、共に行ってくださる主イエス・キリストを通し

て祈り、聖霊の御力をかりて、日々の生活の中で、人を憎むのではなく、愛する道を選び取る、そうして自分がまだ知らない地点へと進む、それ以外に真への平和の道はない、と聖書は語っています。そうして主と共に生きる時、私達は何になるのか。「平和を造るものは幸いである。その者達は、神の子と呼ばれる」(マタイ5:9)。「**神の子となる**」と主イエスは約束して下さいます。主は決して約束をたがえる方ではありません。

人を憎み裁いてしまうような私達を造り変え、祝福に満ちた神の子の命を与えてくださる父なる御神に、その道筋を共に行ってくださる主イエス・キリストに、主の御心を示し主と共に生きる道を選ぶ力を与えてくださる聖霊なる御神に、心から感謝と賛美をささげます。